



図5 肝細胞の孤立性の凝固壊死(矢印)。

この場合の炎症細胞浸潤は、壊死肝細胞に対する反応性のもので軽度に留まり、浸潤細胞は好中球が主体となる。

アレルギー性機序による場合、肝細胞の変性・壊死所見は、ウイルス性肝炎などでみられるものと類似する。肝細胞変性は風船化 (ballooning) の形態をとり (図 6-組織画像)、壊死により好酸体 (acidophilic body) を形成する。変性・壊死は同一の領域で観察される。好酸体は肝細胞素から類洞内に放出され、Kupffer 細胞に貪食されて処理され、壊死物質を貪食した Kupffer 細胞は腫大する。Kupffer 細胞の増生はみられるが、浸潤細胞は、リンパ球が主体で、好酸球や時に好中球の浸潤もみられる。門脈域に好酸球浸潤が目立つ場合は、薬物性肝障害に特徴的な所見ととらえることができるものの、頻度はそれほど高くない。薬物性肝障害の場合、炎症細胞浸潤の程度は、ウイルス性肝炎と比較しても軽度である。